巻頭言

再び臨床に戻った今、思うこと

杏林大学医学部付属病院　木下　千鶴

私は、助産婦として産科・NICUの臨床を経験した後、看護大学で母性・助産の教育に携わり、その後大学院に進みました。そして昨年、8年ぶりに臨床に戻り、現在約1年半が過ぎようとしています。久しぶりの実践は、大切な命を預かること、その為の自らの行為一つ一つへかかる責任の重さ、意義深さを実感させてくれました。

NICUにおけるケアは、デベロップメンタルケアやファミリーケア等々、かつての救命のための知識技術的な側面から、子どもの成長発達そして家族のケアを重視し、実践してゆこうという方向に向いていることを感じています。

私自身も、大学院では、NICUにおけるファミリーケアを主題とした研究をしていました。（これは現在も継続しています。）研究に取り組む中で、ご家族が、安心して、かつ主体的に子どもとの関係性をはぐくんでゆくことを支えることが、私達看護者の大切な役割であることを学びました。実際に臨床に戻ってみると、ご家族との関りが,看護者主体となることも多く、また研究者として関っていた時のように、十分時間をかけることが困難な時も多々あります。しかし、以前とは明らかに自分自身の関りに変化がおきていることも事実です。これまでの研究及び研究活動を続けてゆくことから得た知見を、よりよいケアが提供できるよう、自分及び共にNICU看護に携わる看護者の実践に生かしてゆきたいと思っています。

また、教育の場にいた時には、カリキュラムの変更等に伴い、実習時間が減少したり、新生児看護に関しても年々その内容・質が変化してゆく経過を体験してきました。実践に戻ってみると、実際、新入職の方々が、早期に様々な知識・技術を学ばなくてはならず、教わる側もまたそれを教える側も、苦労しています。そのような中でも新入職の方たちは、日々、目をきらきらさせながら頑張り、責任感をもち、成長しています。そういった関わりは楽しく、喜びでもありますが、NICU看護広く捉えていうならば周産期看護に関する看護基礎教育での不十分さを痛感し、より専門的な継続教育の必要性を改めて感じています。

久しぶりに臨床に戻り、これまで述べたようなファミリーケア・教育の体制、他、倫理的な問題など、NICUにおける看護の課題が数多く存在することを実感しています。同時にだからこそ、やりがいのある領域であるとも思います。様々な課題も1人ではどうにもならないことであっても、皆で協力し合えば一つ一つ良い方向に向くのではないでしょうか。私自身も、同じNICU看護に携わる看護者と協力しながら,これまでの教育や大学院での学びを活かして、赤ちゃんやそのご家族、さらにケアを提供する看護者自身にとっても、すこしでも居心地の良いNICUという場を作れるように今後も努力してゆきたいと思っています。